令和６年度 第40回淡路青少年の主張大会 発表文集

こころ豊か

淡路青少年本部

入賞者を囲んでの記念撮影

第40回 淡路青少年の主張大会 令和６年８月17日（土） 洲本市市民交流センター

「移りゆく時代のなかで、私たちは」

第40回淡路青少年の主張大会
実行委員長（淡路青少年本部長）
清水昭男

40回の節目を迎えた「淡路青少年の主張大会」は多くの応募者・関係者の皆様方のご支援・ご協力を賜り、無事終了できた。小学生高学年の部は応募者が減った。限られた教育時間数の中で、時間を割くことが難しくなっている状況が伺える。中学生の部門では提出期限が行事と重なるため、提出に窮したとも聞いた。両部門ともどうしようもないことだが、少子化の影響も垣間見える。今後の課題とし、本部内で対処できる・できない部分を精査し、継続できる道を前向きに探っていきたい。

8月17日㈯、洲本市市民交流センター　ビバホール。洲本高等学校放送部の司会進行でスムーズに運営された。本ホールでの開催は今年が最後で、来年度から会場を移す。

日頃の思い、出会い、感動と感謝、夢・将来、家族・友人などについて発表者から語られ、その純真な想いと向き合い、感動、勇気、元気を貰い、自らを引き締め、満ち足りた余韻に浸ることができた。そして練習の成果を遺憾なく発揮し、力強く発表された11名（1名はビデオメッセージ・1名は欠席）に大きな拍手とエールを送る。本事業の主旨にご賛同、ご指導いただいた学校関係者並びに暖かく見守って頂いたご家族に深甚の感謝と敬意を表する。審査時間中のダンスは若さが溢れ、ホール内を魅了した。本当にありがとうございました。

新型コロナウイルスの感染は今でも大きな影響を及ぼしている。地域の方々が支えてきた伝統・文化・芸能活動、地域の絆や交流においても3年間のブランクは甚大であり、分断が鮮明になった。それに少子化が拍車をかけている。培われてきた地域力が低下し、繋がりや協力して営まれる集いや活動が制限されたことで、意欲、活力が萎えたことも心配だ。元に戻す時間は過ぎた時間以上にかかる。それでも地域の方々の新たな工夫や枠組み直しで徐々に盛り上がりを見せるが、充分ではない。

加えてロシアのウクライナ侵略等によるエネルギー、原材料供給の減少、働き方改革等で必需品などの物価はまだ高止まりだ。課題や積み残しがある先行きへの不安が現状をより見えにくくしている。社会や大人の課題や問題が子どもたちへと向かっていく。働いても報われない、また抜け出せない格差が鮮明となり、生活に窮するひとが増えることは由々しきことで、それが何世代に渡って引き継がれていくことがより大きな問題なのだ。

そんな中、学校や社会ではいじめ、虐待、差別、ハラスメントが存在し、顕在化する。そんな不都合が隠されることなく、様々な観点から議論され、共有され、サポート体制の構築や居場所づくりが必要だ。併せて、子どもたちには現状を跳ね返す力と耐力を付けてもらいたい。長く生きた私たちは心和らげる居場所や拠り所となり、子どもたちと向き合い、寄り添い、示唆を与えられる大人でありたい。そして手本を示すべき大人の行動や言動が子どもたちからいつも注視され、問われていると感じてほしい。

元気なひとは働き続ける中、高齢者も社会の一員となり、やらなければならないことはたくさんある。細やかな行動や活動から踏み出し、それをしっかり続けることで輪が広がり、確かな動きとなろう。問題から目をそらせ、学ばず、努力せずに、日々に忙殺されて暮らしがちな私たちですが、子どもたちや地域の変化に気づき、ある時は子どもから教えを請い、ある時は強い言葉掛けで、ともに高め合いたい。

本大会で子どもたちの純真な言葉に接し、自らをしっかり見つめてくれている多くの子どもたちが居ることを嬉しく、また頼もしく思う。「大人も謙虚に子どもたちの言葉に耳を傾け、向き合い、ともに行動しなくてはならないし、そうあり続けたい」と心に刻むことができた。

過去には戻せないが、優しさ、思いやりや人間らしさを取り戻させるのはいつでも大人であり、大人の責任であり、今である。「誰もが役割を担い、生かされている」という謙虚さで相手を思いやり、前向きに行動することで自らの立位置が確認でき、未来が見通せる。

読者の皆様には、次代を担う青少年の熱い眼差しを是非、ご高覧頂き、私たちへのメッセージとして心に響かせ、ふれあいや話し合いの一助として欲しい。

最後に審査委員長としてご尽力、また的確なご講評をいただいた赤松利信様はじめご審査いただいた皆様に感謝し、巻頭の言葉といたします。ありがとうございました。

目　次

●あいさつ

●小学生高学年の部

最優秀賞
「淡路島の魅力」
南あわじ市立志知小学校　六年　木曽（きそ）　優菜（ゆうな）　……1

優秀賞
「淡路島の将来について」
南あわじ市立志知小学校　六年　曽田（そた）　幹太（かんた）　……2

奨励賞
「私の大切なお姉ちゃん達」
南あわじ市立志知小学校　五年　榎本（えのもと）みいな　……3

入選
「淡路島の農家になるために」
南あわじ市立志知小学校　五年　冨永（とみなが）　奈生（なお）　……4

入選
「淡路島の魅力を未来につなぐ」
南あわじ市立志知小学校　六年　坂東（ばんどう）　凜星（りんせい）　……5

入選
「淡路島の未来のために～ぼくができること～」
南あわじ市立志知小学校　五年　松下（まつした）　唯翔（ゆいと）　……6

●中学生の部

最優秀賞
「障害とは何ぞ」
淡路市立東浦中学校　三年　津坂（つさか）　盤（めぐる）　……7

優秀賞
「大人ではない私が思うこと」
洲本市立由良中学校　三年　粟（あわ）　悠希（ゆうき）　……8

奨励賞
「言葉にすること伝えること」
洲本市立五色中学校　三年　助嶋（すけしま）　花菜（かな）　……9

入選
「人と人とをつなぐ挨拶」
洲本市立安乎中学校　二年　原田（はらだ）　佑也（ゆうや）　……10

入選
「『不登校』＝マイナスじゃない」
洲本市立五色中学校　三年　篠原（しのはら）　美南（みなみ）　……11

入選
「一歩」
淡路市立東浦中学校　三年　八田（はった）　花凛（かりん）　……13

●大会フォトスナップ

●大会概要

●兵庫県大会結果概要

●ひょうご青少年憲章

小学生高学年の部

最優秀賞

「淡路島の魅力」

南あわじ市立志知小学校
六年　木曽（きそ）　優菜（ゆうな）

私は、淡路島に住んでいて良かったなと思います。私が思う淡路島の魅力は人との関りが深いこと、人が優しいことだと思います。今は淡路島に住んでいますが、生まれたところは西宮市です。二歳になる前に、お父さんの実家がある淡路島に引っ越してきました。淡路島には、親せきもたくさんいます。まず、淡路島で自慢にできることは「人が優しい」ことだと思います。私は西宮市から引っ越してきて四年間保育園に行き、小学生になりました。小学校入りたての頃は不安でいっぱいでした。それは、同級生の中で私一人だけ違う地区の保育園に行っていたからです。小学校に入って知っている友達もいないし、当時学校の全校生徒も少なかったから話せる子も限られていて学校に行くのが嫌だなと思うこともありました。でも学校に行くにつれて少しずつクラスの子と話せるようになり、他の学年の子も話しかけてくれて、少しずつ友達が増えていきました。上級生との会話も増え、学校に行くのが楽しくなりました。六年生と休み時間に鬼ごっこをしたり、体育の授業にドッヂボールをしたりなど学年合同で行うことがたくさんありました。また分からない事があったら周りのみんなが一つ一つ丁寧に教えてくれるので困ったなと思うことはあまりありませんでした。学年関係なく仲がいいので私は学校が好きだし、今はとても楽しいです。学校のみんなが少ない人数だと難しいこともありますが、少ない人数だからできることもたくさんあります。今では学校も合併して人数も多くなり友達もたくさんできました。

そして私は今年最上級生になりました。大変なことはありますが、自分が一年生だった時、優しく接してくれた上級生みたいに、今度は私が下級生に優しくできる六年生を目指しています。次は「人との関わり」が深いことが自慢だと思います。登下校の際にも地域の方々が通学路で見守ってくれたり、近所の方々が声をかけてくださっているので安心して通学できています。以前学校の防災行事で普段から地域の方々とお話をして顔や名前を覚えてもらえると震災が起こった時などに一緒に逃れる人がいるから地域の人との関わりが大事だということを勉強しました。防災行事には老人クラブの人たちが来てくださり、各地区ごとに分かれて過去にあった震災をもとに危険なところを皆さんに教えていただきました。過去には私の家の前が水でつかったこともあったそうです。私は初めて聞いたのでとても驚きました。経験したことをお話ししてもらえるのは今後に役立つし、それを私たちが次の世代に繋いでいくのも大切だなと感じました。互いに助け合って暮らしていける淡路島が私は大好きです。

自然が豊かで人の優しい淡路島は数えきれないほどの魅力がつまった島です。人が優しいというのは簡単にできることではありません。それは昔から現在まで受け継いでくれる人がいるからだと思います。だから私もそんな一人になれるように淡路島の魅力を学び発信していきたいです。

優秀賞

「淡路島の将来について」

南あわじ市立志知小学校
六年　曽田（そた）　幹太（かんた）

ぼくは、淡路島が自然にめぐまれていて、食べ物も美味しいので、すごく良いところだと思います。だから、その淡路島の自然を守ったり、水産業や農業ということを未来に残して行くには若い人の力が必要になります。ですが、淡路島は少子高齢化、人口減少が進んでいます。ぼくの住んでいる南あわじ市志知は高速道路に乗るまですぐだし、大きなスーパーもあって車がなくても陸の港西淡からバスに乗れば神戸や大阪に行くことが出来ます。しかし学校は各学年人数は少なく、便利な所なのになぜ人が少ないのかなと思いました。ぼくが思うことは、空き家や空き地の多さです。今は、車で道を走っている時によく空き家や空き地を見かけたりします。実際、淡路島では二〇二四年現在で専用住宅の三割が空き家となっています。この数字は全国平均の約二倍となっています。そこで、空き家になっている場所を市が提供して、そこをリフォームしたりして住居やカフェにして使ったら、無駄な土地も減って、観光客も増えると思うのでぜひやってほしいと思います。

次は、高速バスで行ける所を増やしたら良いと思います。高速バスは今でも陸の港西淡からは神戸や大阪に行けるし、志知の高速道路のバス停からは香川などに行けます。さらに行ける場所を増やしたら、車だと遠くまで行くことが出来ますが運転手は疲れたりするけど、バスだと気楽に行けるから、行ける場所も広がっていって良いと思います。

その次は、農業の仕事をしている人の高齢化が進んでいることです。今は「畑をしていた人が亡くなって、畑をしないままになっている」などの理由で畑が放置されて、雑草が生え放題になっている所があります。そのような所を市が整備して、きれいな畑にして、新しく移住してきて農業がしたい人に畑をゆずるサービスをしたら良いと思います。そうすれば、農業をする人も増えて淡路島の玉ねぎやレタスなどの代表する農作物を作る人も減らずに長く続くと思うし、使われていない畑も減って玉葱の生産量も増えると思います。

最初にも言ったけど、淡路島は海があって、山などの自然にもめぐまれていて、玉ねぎや海の幸、淡路ビーフとか食べ物も美味しいとかいろんな良い所があります。こういう豊かな自然や美味しい食べ物を保ち続けていくことが大切だと思います。ぼくは人がたくさん住み、建物が増えて、人口が増えて行くのは良いことだと思うから、自然と保全活動などをしてバランスを保って、守っていきたいと思います。それをこれからやって行くのは僕たちだから、淡路島のことをもっと学びＰＲすることによって、若者が住み良い淡路島になったらいいと思います。

奨励賞

「私の大切なお姉ちゃん達」

南あわじ市立志知小学校
五年　榎本（えのもと）みいな

私の大切な人は、姉妹です。私は、二人の姉がいます。

一人目は、長女、れいな、高校一年生です。島外の学校に通っていて、バスケットボール部に入っています。性格は真面目で勉強がよくできるけれど、家ではのんびりすごしています。

続いて次女、あいな、中学一年生で姉と同様、バスケットボール部に入っています。性格はテンションが高めで、自分のことが大好きです。

最後に私、みいな、小学五年生です。私もバスケットをしています。私の性格は、慎重で、人見知りです。姉妹三人はふしぎなことに、性格がかなり違います。

れいなお姉ちゃんと一緒にいると、適当に返事をされた時は悲しいけれど、しばらくすると一緒に遊んでくれることがあるので、その時はとても楽しいです。また、外出した時は特に優しく接してくれるので、その時は嬉しいです。

あいなお姉ちゃんと私は、ゴルフをしていてよく一緒にレッスンをしに行きます。あいなお姉ちゃんといると、いつも気がよく合って、話すのが楽しいです。しかもテンションが高いので、自然と一緒にいると楽しくなります。私が話したときは、いつまでも話してくれます。私が二人の姉といて楽しいことは、一緒に遊んでくれることです。

私は、姉妹がいて良かったなと思うことはたくさんあります。特に良かったと思うことを二つ紹介します。

一つ目は、学校の友達の家が離れている子が多いので、放課後などは遊ぶことがあまりないけれど、姉妹がいてくれると、一緒に遊んでくれるので、嬉しいです。二つ目は、私は一人でいると寂しくて、悲しくなりやすい性格なので、姉妹がいないと、私は毎日悲しい気持ちですごしていたと思います。

でも、あと二年すると、れいなお姉ちゃんは高校を卒業して大学生になるので、一人暮らしをすることになるし、あいなお姉ちゃんは、高校生となって、家にいる時間が少なくなります。だから、二人のお姉ちゃんと一緒に居られる時間を大切にしていきたいです。

私は、あいなお姉ちゃんとれいなお姉ちゃんと一緒にいると、ケンカをするけれど、一緒にいると楽しくなることの方が多いです。お留守番をしているときも、一人の時より居てくれると心強くなるので、れいなお姉ちゃんとあいなお姉ちゃんの妹で良かったなと思いました。生んで、仲良く育ててくれたお母さんとお父さんに感謝したいです。お父さんとお母さんもケンカすることはあまりないので、仲良しな家族です。これからも、家族の時間を大切にすごしていきたいと思います。

また私も、あいなお姉ちゃんの様に自分に自信を持ち、自分から行動したり、れいなお姉ちゃんの様に勉強を頑張って、様々な事に挑戦したいと思います!!

入選

「淡路島の農家になるために」

南あわじ市立志知小学校
五年　冨永（とみなが）　奈生（なお）

わたしのゆめは、大好きな野菜を作ったり、食べてもらう人においしいと言ってもらえるような野菜や果物を作ることです。わたしの好きな野菜は「トマト・じゃがいも・さつまいも・枝豆・大根・にんじん・オクラ・かぼちゃ・レタス・玉ねぎ」です。好きな果物は「さくらんぼ・かき・いちご・すいか・メロン・パイナップル・びわ・すもも・もも・なし・ぶどう・みかんなど」です。淡路島では、玉ねぎ・レタス・キャベツ・白菜・ブロッコリーなどが有名ですが、わたしは有名なものより品質を長くたもてる物をわたしは作りたいです。

なぜ野菜を作りたくなったかというと、理由は二つあります。一つ目は食べてもらう人たちに、

「おいしい野菜だ。また買いたい。」

と言ってもらえる野菜を作るまでに、たくさんの努力を体験して、おいしい野菜が収かくできるまでが楽しみだからです。自分が作りたい野菜を作るには、農業についての知識、自分の気持ち、野菜への愛じょうが大切だなと思います。知識をえるには、農業の勉強ができる学校に行って勉強をしたり、自分で農業のことについて調べたりするなどのいろいろな方法があると思います。だから高校は農業の勉強ができる高校に行きたいと考えています。自分の気持ちを高めるには、農業のことをもっと知り、きょう味を持つことが大切だと思います。そのために、農業の勉強を高校に入学するまでに少しずつしていこうと思います。

もう一つの理由は、淡路島の豊かさを守るためです。農家になると、田畑を守ることができると思ったからです。家の周りでも、田畑があるけれど、何も作られずに放置されている田畑がふえてきました。何も作られていない田畑を見ると、淡路島の豊かさが減っている気がして、悲しくて、さみしい気持ちになります。淡路島の豊かさをこれ以上、減らさないようにするのがもう一つの理由です。そのためには、農業を勉強をしてきて、農家の先ぱい達と「農業は楽しい仕事」ということを広めて農業をする人をふやし、何も作っていない田畑を減らして淡路島の豊かさを守っていきたいです。そして、おいしい野菜や果物を作ることができるようになれば、次にその野菜で、加工品を作ってはん売もしてみたいです。例えば、四年生の時にきょう味を持ったたくあんです。あまい味とポリポリといい食感で食べる、止まらない味の商品を作りたいからです。そして、自動はん売機で作ったものをいろいろ売りたいです。

わたしのゆめである、大好きな野菜作りについて考えると、品質かんり、売れなかった場合、害虫による収かく不足などの大変なこともあることが分かりました。けれども、そのゆめをあきらめず、ゆめをかなえるためにがんばっていきたいです。

入選

「淡路島の魅力を未来につなぐ」

南あわじ市立志知小学校
六年　坂東（ばんどう）　凜星（りんせい）

ぼくは淡路島に生まれて良かったと思っています。淡路島には自然がたくさんあるので、小さい時からずっと、暖かくなってくると出てくるたくさんの昆虫たちを採集して育てるのが楽しみで大好きです。淡路島の自然は多くの命を育んでくれます。そしてその豊かな自然は、海産物に畜産、野菜に果物と新鮮でおいしい食材を、もたらせてもくれるのです。中でも特に有名でおいしいと思うのが玉ねぎです。淡路島の玉ねぎはとてもみずみずしく、甘みがあって、どんなお料理に入れてもおいしいです。もし「淡路島の玉ねぎを食べたことがない」という方がいれば、サラダにしてそのまま味わってみてほしいです。きっとそのおいしさに驚かれるのではないでしょうか。淡路島の食材には「自然の恵み」がたくさん詰まっているからこんなにおいしいんだと思います。そしてこの「自然の恵み」をぼくたちは責任を持って守っていかなければいけません。

ニュースなどでも最近よく耳にする、地球温暖化や森林破壊、海洋汚染などの問題について、一人一人が真剣に考え、自分たちの未来のためにきちんと取り組まないといけないと思います。地球温暖化が進み、気温が上昇しつづければ天候にも影響が出て、豊かな作物は育ちません。森林破壊が進むと、温室効果ガスの排出が増加して地球温暖化へつながります。そして海洋汚染は魚の数や種類を減らす原因となり、生態系のバランスを崩してしまいます。これらの問題を解決する努力をしなければ、「自然の恵み」がなくなってしまいます。

ではどうすればいいか？

昨年ぼくは社会の授業で「リデュース、リユース、リサイクル」について学びました。これらはどれも「環境保護のための取り組み」です。ゴミの発生量を減らすこと。ゴミになる前と同じ用途に再使用すること。再使用できないものをリサイクルすること。これらのことを日々の生活の中で取り入れて、実践することが大切だと思います。例えば、ペットボトル飲料のペットボトル。これを海に投げ捨てれば海洋ゴミとなり、海洋汚染の原因となります。でもペットボトルは、きちんと分別して捨てることにより、リサイクルできます。一つのものを正しく捨てることで、環境を守ることにつながるのです。こういった取り組みがより多くの人々に広がるように、その第一歩として「自分にできることは何か？」を考えました。ゴミを分別して捨てる。無駄なものは買わない。ものは大切に長く使う。食べ残しをしない。マイボトルやマイバックを持参する。これらを継続して実践していこうと思います。そうしてこれからの未来の環境を守る努力をして、また、淡路島の豊かな自然を未来につなげて行きたいと思います。

入選

「淡路島の未来のために ～ぼくができること～」

南あわじ市立志知小学校
五年　松下（まつした）　唯翔（ゆいと）

今の淡路島は観光地がたくさんあり、鱧・三年とらフグ・サクラマス・玉ねぎ・牛肉などおいしい食べ物がいっぱいです。テレビでもよく放送される人気の淡路島。だから、観光客がたくさん来ています。ＧＷでも県外ナンバーの車が、家族連れや友達連れでたくさん走っていました。人がたくさん集まることで市が活気にあふれ、お金が入ります。実際、観光客からの収益によって、道の駅うずしおや淡路人形座、水仙郷などの観光施設が建てられました。

今の淡路は、若者が減っていると耳にします。南あわじ市のＨＰによると人口推移が十年前と比べると約六千人減少し、特に若い世代の減少が目立ちます。このことより、淡路島で働ける場所が限られ、島外へ仕事を探しに行っているからだと思います。

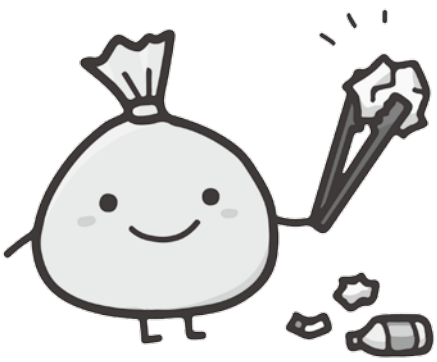
近年、大企業の参入により、働く場所ができました。働く場所があることで、若者が集まり人口が増加します。雇用が増えることで淡路島が活気付きます。

心配なことは、農業の後継者や漁業の漁師さんたちも減少していることです。農業の後継者がいなくなることで、淡路島のおいしい食べ物がなくなってしまいます。また、田んぼなどが草場になってしまいます。草場になることで風景が悪くなるし、害虫がいっぱい発生して周りの作物に被害を与えてしまいます。そうなると、今まで頑張ってきた農家さんも辞めたり『あとを継ごう』と思う人もいなくなるかも知れません。風景も悪くなることで、せっかく淡路島に遊びに来てくれた観光客もガッカリさせてしまいます。漁業に関しても、同様のことが言えると思います。ガソリンが高くなったことや魚も海に少なくなったことで、生活は楽ではありません。後継者も出来にくいと思います。物価も上がったことで住みにくくなっていますが、人口が増え、市がよくなると、補助金なども増やせると生活もしやすくなり後継者問題も解決すると、ぼくは思います。

淡路島は田舎ですが、たくさんいいところがあります。食べ物もおいしいです。こんな素敵な淡路島を守っていくために、今のぼくに出来ることは淡路島の魅力をもっとアピールしていくことと町をきれいにすることだと考えました。

こうすることによって、淡路島の未来はきっとよくなります。

ぼくは、その第一歩としてやっていきたいことは、登下校の時間や休みの日に積極的にゴミ拾いをしたいです。ぼくは、大人になっても淡路島に住みたいです。だから、もっと色々な知識をつけて淡路島をよくしたいです。



中学生の部

最優秀賞

「障害とは何ぞ」

淡路市立東浦中学校
三年　津坂（つさか）　盤（めぐる）

皆さん、「障害」とは何ですか。

こう聞かれると、どんなことを思い浮かべますか。人によって考え方は違うと思いますが、多くの人は「目が見えない」、「足が不自由」などといった「○○できない」という不便な印象があることだろうと思います。

ちなみに、僕は耳が聞こえないという障害を持っています。だから社会に出れば障がい者の一人であり、確かに他の人と比べて不利になることもあるかもしれません。ただ、僕も一人の人間であることに変わりないのも事実です。それなのに、ただ障害があるだけで差別されてしまうという現実があります。僕も、障害を理由に差別されたこともあるし、これからも差別されることはあるだろうと警戒しています。当然、僕のみならず、他の「障害を持っている人」も同じことを思っているのではないでしょうか。これで本当にいいのでしょうか。なぜ、こうなるのか。それは、それほど差別が日常化しているからだと思います。

では、なぜこのような差別が起こるのかを考えていこうと思います。前述のような「○○できない」的な不便な解釈も一つの見方ですが、そこから「障害がある人は面倒だ」という解釈に発展したり、もっといえば「そんな奴は排除すべきだ」というような考えに至り、そこから差別に発展するのだと僕は考えます。あるいは、その「障害」を持っているから自分より弱いと勝手に思い込んで、弱い者いじめとして差別しているのかも知れません。ただ、どんな理由があってもなぜそれが許されないのかというと、マイナスな解釈の他にも、別の解釈が成り立つと思うからです。

僕にとって、障害の有無はどうでもよく、障害は「○○できない悪いもの」と見るのではなくて、「一つの個性」としてみればいいと思います。それに則って考えると、差別をするということは、その人の個性を否定するということだといえます。例を挙げましょう。あなたは野球が好きだとします。これは「野球が好き」という個性です。そこに誰かが「野球好きは異常だ」と言う。障害者差別は、これと同じです。もっとも、障害が有ろうが無かろうが同じ人間であることに変わりはないので、何があっても、障害のない人とも平等でないといけないのです。野球が好きな人に、他人が「お前は異常だ」と言っていることがおかしいと思えるのなら、障害のある人に対しても同じように考えるべきです。

人には個性があります。ピアノが得意な人、サッカーが好きな人、英語が流暢に話せる人、絵が上手い人…。それを言い出せばキリがない中に、「耳が聞こえない」「目が見えない」「足がない」などといった身体の不自由もあるのです。ただそれだけなのです。それを否定することは、その人らしく生きる権利を侵害するということですから、差別は立派な人権問題であります。

さて、僕は耳が聞こえないと話しましたが僕は二歳で耳が聞こえなくなって以来、およそ十年ほど装具を着けて生活してきました。そしてこれからも、一生これと付き合って生きていくことになります。僕にとって耳が聞こえないことは身近なことであり、当たり前のような感覚で生きてきたので、この

感覚を体は完全に覚えてしまっているのです。そして気がついたのです。周りの環境が整っているおかげで障害などないかのように暮らしていたからかもしれませんが、自分はこれが障害であることを忘れて、一つの個性と同じ感覚で生きてきたのだと。その時に分かったのです。障害は、身体的不自由があることで生活に支障が出るということですが、それを持っていても、不幸ばかりではないことを。僕は、障害は一つの個性だという感覚で生きてきました。これからも同じです。僕のような人もたくさんいます。これも人間が持つ個性の一つです。尊厳です。だから、障害があるなし関係なく、全ての人に幸せに暮らす権利が与えられなければいけません。だから、障害とは、身体に不自由があることで生活に支障が出て、それに対して支援が必要なことであり、一つの個性でもあるということです。

では、最後にもう一度聞きます。

「障害」とは何ですか。

優秀賞

「大人ではない私が思うこと」

洲本市立由良中学校
三年　粟（あわ）　悠希（ゆうき）

大人と子供の明確な違いとはなんだろう。日本は十八歳で成人とされ、選挙に参加したり、自分のカードを持ったりすることができるようになる。私は大人になるのが楽しみだ。きっと自分自身いろいろなことやものに触れ、今以上に自由になるだろう。しかし、同時に不安な思いもある。

私は、大人に対して訝りを覚えることがある。それは、学校の見た目に関する校則についてだ。細かい決まりを守るために、自分の好きな髪型ができないし、風が強い日はスカートを気にして過ごさなければならない。私は、どうして大人たちは、校則という決まりを作ったのか、考えてみることにした。私たち子どもに、協調の意識を持たせるため、見た目をきっかけにトラブルが起こることを防ぐため。つまりその答えは、「見た目に関する校則を守ることには、みんなにとってのメリットが多いから」だ。どこか納得しきれないながらも、私は一つ気付いたことがあった。幼い頃の私だったら、きっと「校則は面倒だ」と思うだけで、この理由まで考えてみようとすることはできなかっただろう。中学生になった私は、自分の感情だけでなく、多角的で理性的な観点を持てるようになっていた。私は私自身がだんだんと「大人」に近づいていることを実感した。

その一方で、私は私が大人になった時、「子供」側の視点を思い出すことは出来るだろうかと、不安を抱いていた。大人になると立場ができる。その一つが、子どもを社会的に成長させるというものであり、その中に「学校で決められた校則は守るべきだ」という考えが概念のように植わっているのかもしれない。子どもの時にいらないと感じていたものを、大事なことだと思えることは、いわゆる「大人になった」ということなのかも知れない。しかし、私たちは子どもの時の考え方や感じ方を、決して失くしてはいけないと思う。視界の彩度がぐんと上がるような興奮、心を刺されたような痛み、緊張でひっつく喉、脳の奥がビリビリとするような衝撃。まだ生々しく蘇る、これらの感動は、大人になった時

にはすでに「経験」として風化してしまっているのかもしれない。大人になることで、この胸の高まりは、感じられなくなっていってしまうのではないか。私はそれがとても不安だ。

大人と子どもの明確な違いとはなんだろう。大人になると時間が経つのが早く感じるのは、一日に感じる感動が少なくなっていくからだと考えられている。人生において感動した回数が増えて行くにつれ、その一つの感動はさらに大きな分母を抱えることになるため、単なる日常に過ぎなくなっていくのだろう。そうなると大人になった私は、新しい感動との出会いと生きる子どもを、別の生き物のように扱うのかもしれない。

しかし、大人も子どもも関係なく、他人や自分の感じた感動一つ一つを受け入れ、新しい考えを生み出してみる。そうすれば、一人の人生だけでなく、社会はより豊かになっていくと思う。だから私は、大人になりかけている今感じていることを大切にしたい。そうすればきっと、私が社会的に大人になっても、いつでも子どもの視点になることができると思う。子どもの意見は、単純であっても、強い意志と、その根拠がある。それには社会を大きく進化させる力があると思う。

私は大人になるのが楽しみだ。私の積み上げてきた知識、経験、そして感動という「宝」はもっとたくさん増えていくだろう。そして、私は一人一人の持つ「宝」が、いつまでも輝き続けるように、全ての人に大切に尊重されるべきだと思う。私は、そんなたくさんの希望を抱いた人々によって創られる美しい社会が、私の未来であってほしいと、強く思う。

奨励賞

「言葉にすること伝えること」

洲本市立五色中学校
三年　助嶋（すけしま）　花菜（かな）

「あなたは日頃、人に感謝を伝えられていますか？」この質問にNOと答える人は一定数いるだろう。なんだか恥ずかしいと感じる人やきっかけやタイミングがないという人もいるのではないかと思う。口にはしないがいつも心の中で感謝しているという人もいるかもしれない。しかし私は感謝を伝えるという行為は私達に必要不可欠なものだと考える。感謝を伝えることこそが人とのつながりが少なくなっている現代社会においていちばん大切なことなのではないだろうか。

私の家は小学六年生のときにひとり親家庭になった。母が病気にかかり実家に戻ることになり、父、私、妹の生活が始まった。父との生活はうまくいかないことも多かった。それまで身の回りの世話をしてくれていたのはいつも母で、父と過ごした時間より母と過ごした時間のほうが圧倒的に長かった。そのせいか、私は父との間にある溝を感じていた。私は昔から人見知りで人と仲良くなるまで時間がかかるタイプだった。そのため周りの変化に対応することが苦手で父ともそう簡単には打ち解けられなかった。

父との溝はなかなか埋まることはなく時間は過ぎていった。そして三月、小学校生活の締めくくりとして「保護者への手紙を書きましょう」

という課題が出された。みんなすらすらと鉛筆を走らせていたが私は何を書こうかと悩んでいた。小学校生活の思い出を書くにも、父と共有している思い出はほとんどなかった。家でも簡単な会話は交わすけれど、父は仕事で帰りが遅かったこともあり、くだらない話で盛り上がったり将来のことについて話したりすることもなかった。考えた末、私が手紙に書いたのが日頃の感謝だった。普段、面と向かって感謝を口にする機会はなかった。恥ずかしいし、まだ完全に打ち解けていない父にはなんとなく言いづらかったからだ。対面では素直になれないからこそ、手紙の中で日頃の感謝を伝えようと思い私は便箋に鉛筆を走らせた。一文字一文字丁寧に書き連ねていった。不格好な文章だったが、自分の言葉で思いを伝えたかった。

父は手紙を読み、とても嬉しそうな顔をしていた。そして私の口からは自然と「いつもありがとう」という言葉が出た。父は一瞬、驚いたような顔をしたあと、私に微笑みかけた。やっと父との間にあった溝が埋まった瞬間だった。このとき私は、感謝を伝えるということの大切さを改めて認識することができた。それから私は感謝を言葉にするということを意識するようになった。

「沈黙の感謝など、誰にも伝わりません」

この言葉はアメリカの著作家のガートルード・スタインの言葉だ。拙い言葉でも自分で伝える、それが大切なのだ。もちろん、人の心を完全に読むことができる人はいない。つまり思っていることは言葉にしないと相手には伝わらない。感謝は言葉にすることで初めて価値が生まれるのだ。

人は大昔から言葉を交わし仲間と協力しながら生きてきた。感謝を伝えることはそんな人間の暮らしに欠かせない、人間だからこそ生まれた美しい行いなのだ。感謝を伝えることは大昔から今に伝わる素晴らしい教えだと私は考える。感謝を伝えることの大切さがこの先の未来にも当たり前のように受け継がれていくために、私自身もこの先、色んな人に感謝を伝えていきたい。

入選

「人と人とをつなぐ挨拶」

洲本市立安乎中学校
二年　原田（はらだ）　佑也（ゆうや）

みなさんは、挨拶は何のためにあると思いますか。人と人とをつなぐために、僕はあるのだと思っています。それは、僕のこんな経験からです。

僕は先日、トライやるウィークでホテルに行きました。そこでは、レストラン掃除、フロント業務、部屋点検などたくさんの体験をさせていただきました。僕は「お客様にどう接すればいいのかを学ぶ」という目標を立てて行きました。ホテルでは、お客様と接する機会が多く、事業所の方々を見ていて、僕は「すごいなあ」と感じることがたくさんありました。明るい笑顔と大きな声、すごく気持ちの良い挨拶をしていたのです。「なんて気持ちの良い挨拶なんだろう。お客様も僕と同

じように感じているんだろうなあ。」と思いました。僕たちも一緒にフロントに立たせてもらいました。僕は挨拶をするのは、得意ではありません。知らない人に自分から挨拶をするのが怖かったからです。でも事業所の方を見て、決心しました。僕も事業所の方のような挨拶をしようと。

お客様がエレベーターから降りて、フロントの方に来られました。僕たちは、お客様に、明るく大きな声で挨拶をしました。「おはようございます。」すると、お客様も「おはようございます。」と返してくださいました。何か心の中が温かくなったように感じました。僕とお客様が温かい糸でつながれたかのように思えたのです。そこから、そのお客様と少しお話をしました。すごく優しい方で、楽しかったです。このような会話もすべて、挨拶から始まったので、「人と人とをつなぐ挨拶は大切だ」と思ったのです。僕はこの出来事をきっかけに良い挨拶とは、することに意味があるのではなく、相手が気持ちよくなることだと考え、挨拶をするようになりました。気持ちのこもった挨拶を心がけていると、いつの間にか、知らない人にでも怖がらずに挨拶ができるようになりました。

この経験を通して、挨拶の本当の意味に、気付けたのではないかと思います。今まで挨拶だけではなく、自分から行動することが怖かったのですが、何事も前向きに考え、積極的に行動することが少しできるようになりました。僕は、これからも知らない人や、友達、先生などにも「自分が思う良い挨拶」を考え、挨拶をしようと思います。そのような挨拶は、自分と相手がどちらも笑顔になれると思っています。挨拶だけでなく、いろいろなことに挑戦していきたいと思います。挑戦して失敗してしまったとしても、その挑戦は、かならず、自分のためになると、僕は、思っています。

みなさんも、気持ちの良い挨拶ができる人になりませんか。その気持ちが大切だと僕は思います。自分が苦手だと思っていることも、まずは挑戦してみることです。そうすれば自分のためにもなるし、将来への道がもっと広がっていくと、僕は信じています。

入選

「『不登校』＝マイナスじゃない」

洲本市立五色中学校
三年　篠原（しのはら）　美南（みなみ）

皆さんは「不登校」と聞いてどのようなイメージを受けますか。多くの人がマイナスのイメージを思い浮かべると思います。私は「不登校」＝マイナスなことではないと考えています。むしろ自分自身を見つめ直す良い機会だと思っています。

小学校六年生のころ私は不登校でした。いじめを受けていたわけでもないし、できれば学校に行けるようになりたいと思っていました。苦手な人はいるけれど友だちと話すことは楽しいし、勉強も好きで不登校になる自分を想像することさえできませんでした。

不登校になってからは、たまに登校したときにも緊張して友だちと話

すと喉がきゅっと詰まったり自分の意見をうまく伝えられなかったりしたのが悔しくてトイレに篭って泣くことしかできませんでした。少し話すだけですごく疲れるし、自分の発言や行動が全て気持ち悪く思ってしまうのが苦痛でした。「どうして私はこんなにダメなんだろう」「学校に行けないことはダメなことだ」毎日泣きながら思っていました。

六年生の三学期が始まったころ、ときどき午後から保健室登校ができるようになりました。学校に行くことができて少しの達成感はありましたが、それでも教室に行けずにただ座っているだけでやっぱり自分は何も変わっていないと感じました。落ち込む日々が続くなか、私にいつも優しい言葉をかけてくださったのが当時の保健室の先生でした。ある日私が

「なんで教室に入れないのかわからない。普通に登校できるようになりたい。」

という話をすると、いつもは私の隣で話を聞いてくれていた先生が私の目の前に座り、私の目を見て、

「普通に登校する必要なんかない。学校に行けなくたって自分自身を見失わなければいい。自分が何をしたいか、どんな目標を達成したいかが大切。」

という助言をくれました。私はすごく救われたような気がしました。不登校が悪いことなんだ、普通じゃないんだという私の考え方を壊してくれたことがすごく嬉しかったです。

その次の日、私は学校に行けませんでした。ですが、自分の中での目標をどんどん紙に書くようにしました。「絵を上手に描けるようになる」「自信を持って中学生になれるようにする」など沢山の目標を決めました。そうすると目標のために毎日何をするべきか、何をしたいかが分かってくるようになりました。例えば「中学生は勉強が難しいから今のうちに一時間自主学習をしよう」と自然に思えるようになり、一時間勉強したことが自分の自信へとつながりました。今まで不登校を直そうとずっと思ってきて自分が何をしたいか、見失っていたんだと気づいたときは頭の中の霧が晴れたかのような、スッキリとした気持ちになりました。

結局、六年生のほとんどは学校に行きませんでしたが、自分にとって有意義な時間であり、かけがえのないことに気づくこともできて、すごく成長できたと思います。

真っ暗闇の中でポツンと一人だけ残されても、何もする気にならず、ずっと立ち止まっていることしかできません。その中で一つの光があれば少しでも救いになってそこに向かっていこうという気力になると思います。何かうまくいかないことがあったときに自分を責め続けて自分自身を見失うことは辛く重苦しいです。自分自身が何をしたいか、どんな目標を達成したいかを決めるだけでも原動力となり光となるということを実感しました。だから私は「不登校」＝マイナスなことではなく自分を見つめ直す良い機会だと思います。

入選

「一歩」

淡路市立東浦中学校
三年　八田（はった）　花凛（かりん）

あなたは自分のことが好きですか。

私は自分のことが好きです。私は好きであることは生きていく上でとても大切なことだと思っています。

昔、私はある言葉に腹が立ちました。それは「自分が嫌いな人は周りの人にも好かれない」と言うものでした。

誰が言ったのかは覚えていないけれど無性に腹が立ったことを覚えています。自分が好きでいられるのならどれだけ楽しいのだろうと何度も思いました。好きになる理由はないのに、嫌いになる理由はいくつも出てきました。些細なことで怒ってしまう自分が嫌い、わがままな自分が嫌い、すぐに泣き出してしまう自分が嫌い、沢山の嫌いが私にはありました。

しかし、今の私は昔の私とは違い自分のことが好きなのです。それはきっと、考え方を変えたからでしょう。小さな嫌いの積み重なりは自己肯定感を低くしてしまいます。それはどうしようもないことだと思います。

けれど、自己肯定感を上げる方法は聞いてみると案外簡単なものです。それは「許す」ということです。簡単に聞こえる「許す」ということは、人によって、とても難しいことに変わるのです。だからこそ少しずつ乗り越えていくのです。些細なことで怒ってしまう自分を許そうと思う。それは時として、過ちを正しくしてくれるから。わがままな自分を許そうと思う。周りの意見に流されず自分の意見を持つことは新しい道を作ることが出来るから。すぐに泣き出してしまう自分を許そうと思う。誰よりも相手のことを思い寄り添うことができるから。

しかし、何もかも許していいわけではありません。許していいこと、許してはならないことを見極める力もつけていかなければなりません。今はまだ間違えてしまうかもしれないけれどこれから先必要になることだと思うのです。

自分を好きになることは、何をするにも周りの目を気にしてしまう、自分をうまく出せない人の、ほんの少しの手助けになります。どんな時も自分を追い詰め過ぎてはいけません。苦しくなって早く抜け出そうとすれば、視野が狭くなってしまうから。少し気分転換をしたり定期的に休息をとったりした方がいい。自分と向き合う時間が私たちには必要なのだと思う。自分と向き合い弱いところを見ることは怖いけれど、周りの人の手を借りながら、少しずつ向き合って行かなければならない。向き合わなければ許すことすら出来ないのだから。人前で堂々と自分が好きという必要はない。ただ自分の中で何かが変わる瞬間を待つだけではその瞬間は一生来ることはないと思うのです。自分で掴みにいくのだ。時間はかかるかもしれないけれど、変わろうという気持ちがあるのなら、いつだって変わることができる。

許すということは自分を好きになることのたった一歩に過ぎないかもしれない。ただその一歩が、どれほど困難なことか。たった一歩。十分すぎる。その一歩の中に込められた大切なもの。言葉では説明することの出来ない自分自身でのみ感じることができるもの。嫌いな自分をほんの少し好きになるための方法。いくつもある方法の中の一つ。ただ頑張って生きている自分のためにできることをたった一歩に込めて。

大会フォトスナップ

開　会

開会あいさつ　清水実行委員長

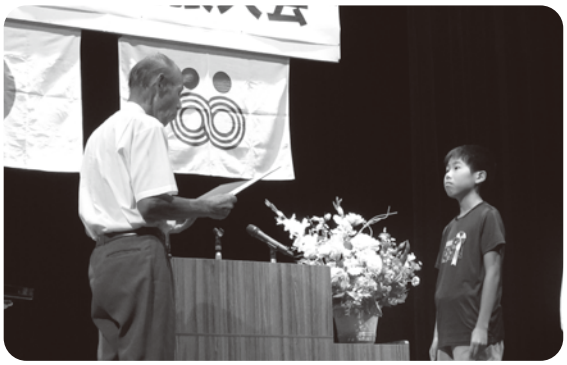
司　会　県立洲本高等学校放送部

来賓あいさつ　浜田県議会議長

講　評　赤松審査委員長

表　彰　中学生の部

表　彰　小学生高学年の部



入賞者

第40回淡路青少年の主張大会概要

1　趣　旨

ふるさと淡路の担い手となる青少年が日常生活や団体活動等の体験を通じて、考えていること、感じていることを主張して表現することにより、青少年自らが社会の形成者としての役割と責任を自覚し成長することを願うとともに、彼らが淡路島の自然、歴史、産業、伝統文化など豊富な魅力を学び、よく知り、将来的な島の魅力の発信へと繋げることを期待し開催しました。

2　発表会　令和６年８月17日（土）
洲本市市民交流センター　ビバホール（洲本市宇原１７８８－１）

3　主　催　淡路青少年の主張大会実行委員会

4　後　援　兵庫県淡路県民局、兵庫県教育委員会淡路教育事務所、洲本市教育委員会、南あわじ市教育委員会、淡路市教育委員会、(一財)淡路島くにうみ協会

5　作文募集期間　令和６年５月1日（水）～６月２８日（金）

6　作文・テーマについて

（１）応募資格　淡路島内に在住または通学する小学生（４～６年）、中学生

（２）テーマ

小学生高学年の部

・日頃考えていること、周りの人に伝えたいこと

・ふるさと淡路島を大切に思う気持ち、将来の淡路島などについて、参考図書等を読んで主張したいこと（※参考図書「淡路ふるさと学習副読本」「あわじ環境未来島副読本」）

中学生の部

・将来への希望や夢

・学校や家庭、地域、社会に対しての意見や提案　など

7　実施方法

（１）小学生は淡路地域大会として、中学生は「少年の主張兵庫県大会」の淡路地区予選（最優秀者を県大会に推薦）として実施しました。

（２）部　門　小学生高学年の部及び中学生の部の２部門

（３）所定のテーマについて原稿を募集し、原稿審査により発表者を選び、発表大会を実施しました。

（４）発表者　小学生　５名、中学生　６名

8　表　彰

部門ごとに「最優秀賞(淡路県民局長賞)」1名、「優秀賞(淡路青少年の主張大会実行委員会委員長賞)」1名、「奨励賞(淡路青少年の主張大会実行委員会奨励賞)」1名、入選作品について、賞状及び賞品を授与しました。

9　応募結果

（１）小学校　学校数：1校　作品数：18点

（２）中学校　学校数：５校　作品数：205点　計　５校　223点

10　審査委員

＊審査委員長　赤松　利信（全淡小中学校長会会長）

＊審 査 委 員　川井　史彦（兵庫県淡路県民局長）

齋藤　康人（中学校国語部会代表校長）

倉本　裕樹（兵庫県教育委員会淡路教育事務所指導主事兼社会教育主事）

清水　昭男（淡路青少年の主張大会実行委員長・淡路青少年本部長）

高橋　武信（淡路青少年本部副本部長）

森　敦子（淡路青少年本部副本部長）

11　審査基準

（１）作文審査基準

論　旨

ア 青少年らしい主張であるか。

イ 自らの意見、希望など訴えたいものがはっきりしているか。

ウ 主張の内容が個人の内容にとどまらず、一般性、社会性があるか。

エ 論旨が一貫しているか。

オ 主張の内容が共感と感動を与えるか。

カ 表現上に誤りはないか。

（２）発表審査基準

論調・態度

ア 発声、言葉は明瞭で聞きやすいか。

イ 話しぶりに熱意や迫力があるか。

ウ 素直に、わかりやすい言葉で丁寧に表現しているか。

エ 聴衆をよく見て、落ち着いて表現しているか。

12　大会当日について

大会運営にあたり、下記のみなさんにご協力いただきました。

○司会進行　　県立洲本高等学校　放送部

○ダンスアトラクション　　Dance school SwingBox

第46回少年の主張兵庫県大会「中学生のメッセージ2024」結果概要

1 日時　令和６年９月28日（土）
　　13：00～16：00

2 場所　兵庫県民会館９階　けんみんホール

3 主催　公益財団法人兵庫県青少年本部

4 共催　独立行政法人国立青少年教育振興機構

5 結果

○最優秀賞	「障害とは何ぞ」	淡路市立東浦中学校	３年 津坂　盤
○優秀賞	「『その日』の後悔」	白陵中学校	３年 松田　尚
	「『当たり前』と私」	丹波市立氷上中学校	３年 足立　美樹
○奨励賞	「逃げるという選択」	神戸市立向洋中学校	３年 林　楓夏
（発表順）	「アイヌとこれからの日本社会」	武庫川女子大学附属中学校	２年 倉内　結愛
	「やはり」	小林聖心女子学院中学校	１年 木元　優葵
	「自分らしさ」	兵庫教育大学附属中学校	２年 坂田　爽歌
	「妹との会話から気づいたこと」	福崎町立福崎東中学校	３年 角元　優弥
	「一人じゃない」	赤穂市立有年中学校	３年 柳　志歩
	「祖母の戦争体験を語り継ぐ」	香美町立村岡中学校	３年 西崎　佐智

東浦中学校
津坂　盤さん

ひょうご青少年憲章

いま、私たちは暮らしや社会のあり方が大きく移り変わる転換の時代にありますが、
先の阪神・淡路大震災は、人と社会に何が必要なのかを改めて教えてくれました。
私たちは、これまでの自分の生き方を省みて人間生活の基本に立ち返り、
自らを尊ぶと同時に、家庭や地域や国、そしてかけがえのない地球に生きる人間として、
ひょうごの明日を担う青少年とともに、自信と夢と勇気をもって
２１世紀を築いていくことを誓い、この憲章を定めます。

１　自分を大切にし、自らを律し、行いに責任をもって生きていこう

２　ふれあいを深め、正義感をもち、社会を担う一人として生きていこう

３　人の痛みや喜びを感じあえる心をもって生きていこう

４　多様な人々の存在を受け入れ、ともに支えあって生きていこう

５　自然を愛し、生命を尊び、みえない世界にも襟を正して生きていこう

６　先人に学び、明日に夢をえがき、勇気をもって未来を拓いていこう

平成１２年３月１５日制定　新兵庫県青少年憲章制定県民会議

“明日の兵庫を担う青少年を育てる運動”
シンボルマーク

第40回淡路青少年の主張大会　発表文集

令和６年11月

編集・発行　淡路青少年の主張大会実行委員会
〒656-0021 兵庫県洲本市塩屋 2-4-5
兵庫県淡路県民局 県民躍動室内 淡路青少年本部
Tel. 0799-26-2150　Fax. 0799-24-6934

淡路青少年の主張　参考図書

小学5年生、各小学校・図書館に配付しています。

淡路ふるさと学習副読本

「ふるさと淡路島」

自然や歴史、伝統文化など淡路島の
すばらしさがいっぱい詰まっています。
淡路島の魅力を再発見してください。

あわじ環境未来島副読本

「み　ら　い」

淡路島の良さを生かして、自然に優しく、
健やかに暮らし続けられる地域をつくる
取り組み「あわじ環境未来島構想」に
ついて説明しています。